

彩の歳時記

平成三十年 二月

勅なれば いともかしこし うぐいすの 宿はと問はば いかか答へむ 紀内侍

「天皇のご命令ゆえ、梅ノ木を献上いたしましたのは、大変有難いことですが、もし鶯が『家である梅の木はどこへ行ったのでしょう?』と尋ねたら、どう答えればよろしいのでしょう?」



この歌は十世紀に成立の歴史物語『大鏡』の一節で紀貫之の娘が天皇に託した歌。京都の禅の名刹相国寺十三塔頭（金閣・銀閣等）の一つ**林光院の梅**はこの話のモデルとして有名。古くから**梅と鶯**は対で、掛軸の画賛・装飾品の意匠、花札にも採り上げられています。立春が過ぎ、そこはかたなく春めく頃は、**梅**の美しい季節、風に香って開花を知らせる梅は、春の先駆けで花の一番手**「花の兄」**。皇居東御苑・小石川後楽園、湯島天神など東京近郊も観梅の宴で賑います。花見に先駆けて戸外に出かけて**「春の予感」**を感じてみたいものです。

二月の暦

三日

節分 季節を分ける日。「冬から春」は特に喜ばしいので暦に残った。
如月 衣更着「衣を更に着る」の意。旧暦では、一〜三月が春、ゆえに二月は、仲春。



「豆まき」「鬼やらい」「追儼」豆を撒いて鬼に陰「おん邪気」を追い払う行事。
浅草寺・芝増上寺・成田山新勝寺などでは、**有名人・力士らが豆まきで賑わう**。

四日

立春「**春立つ日**」旧暦では、一年の初めの日。昔は表からみても裏から見ても**「立春大吉」**と読める札「玄閻から入ってきた鬼が、振り返った時に文字をみて、入ってなかったと錯覚して出ていくのを目的とされたお札」を張って厄除けをした。



十一日

建国記念の日(国民の休日) 1961年(昭和36年)施行。他の祝日が祝日法の制定であるのに反し、この日だけが「政令で定める日」。戦争利用という懸念から建国記念日ではなく「の」の挿入により事象そのものを記念する日の解釈で成立。第一代天皇の**神武天皇**の即位された日に因む。

十二日

菜の花忌 歴史小作家・**司馬遼太郎**【1923〜1996】の忌日。彼が好んだ**「菜の花」**に因む。



歴史上の人物像の造型の名手で彼によって人気を得た人物「**信長**、**秀吉**、**家康**、**西郷隆盛**、**坂本竜馬**等」は、彼の作品に負うところが大きいと言われる。「**梟の城**」で直木賞、「**竜馬がゆく**」「**国盗り物語**」「**菜の花の沖**」「**街道を行く**」など。
聖バレンタインデー 宗教的意味は薄れチョココレートなどの贈答などで**「愛を伝える日」**に。意匠を凝らしたデコレーションが街頭のウィンドウを飾り、寒い空気を和ませる。



十六日

西行忌 **桜**と**旅**の歌人として知られる僧、**西行**【1118〜1190】の忌日。元は北面の武士

二十三歳で出家。「古今集」最多の二首入集。芭蕉は西行に憧れ「**奥の細道**」の旅に。「山家集」**願はくは花の下にて春死なむ そのきさらぎの望月の頃**
計らずもこの日は「釈迦の入滅の日・涅槃会」で自身が望んだ忌日。



十九日

雨水【二十四節気】雪が雨に変わり、暖かくなる。

二十三日

皇太子誕生日 **浩宮徳仁親王殿下**は昭和35年(1960)ご誕生で五十八歳に。



2019年5月1日に皇位継承予定。今上天皇が即位されたのが1989年1月8日で当時五十五歳であられたことから、これから新しい時代と皇室の象徴としての期待が寄せられる。

二月の歌

早春賦

詞 吉丸一昌

曲 中田章【1886〜1931】

大正二年

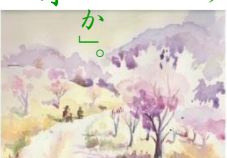
2003年「日本の歌百選」。春を待つ歌の定番。題名の「賦」は比喻によらず

心に感じた事物を直叙した漢詩の形態で「早春に賦す」が原義。文語調の

歌詞は美しく懐かしいが理解されにくくなっている。「名のみ名だけ」

「角ぐむ芽吹く」「あやにく意に反して」「いかにせよどうしろというのか」。

長野県大町中学校の校歌を作りに来た**吉丸**【1873〜1916】が**大町市**、**安曇野**あたりの早春の情景を感じ作ったといわれる。**安曇野(あずみの)**に歌碑。



一 春はあみの風やさや
名のみ 歌はあまの
時にあらずと 声も立てず
二 氷解け去り春は角ぐむ
さては時ぞと 思うあやにく
今日もきのうも 雪の空
今日もきのうも 雪の空
三 春ど聞かば知らずありしを
聞けは急かる胸の思を
いかにせよこの頃か
いかにせよこの頃か